

大塚 智嗣

Tomotsugu Otsuka

デザイン工学

講師

個展

1994 巷房（銀座）

AXIS BUSHI（六本木）

1999 メタルアートミュージアム（千葉・佐倉）

2001 ワコール銀座アートスペース（銀座）

2003 祇をん小西（京都祇園）

ワコール銀座アートスペース（銀座）

2004 GALLERY MARUFUKU（京都烏丸）

個展（ギャラリー丸服・京都）

2005 安楽寺（京都鹿ヶ谷）

グループ展

若手造形展（横浜銀行本店・横浜）

ヌーベルヴァンテ第8回現代漆アート四人展（フジタヴァンテ・千駄ヶ谷）

工芸科教官作品展（東京藝術大学芸術資料館）

KAZ00 展（ヤマギワショールーム・四ッ谷）

Chiba Art Flash Object 02（千葉市民ギャラリー）

「前進する工芸」展（ひろしま市民プラザギャラリー、田辺市美術館）

机上空間のためのオブジェ展 '04 Prologue 冊（NIKI ギャラリー・九段）

漆の表象展（ギャラリー有遊・長野県安曇野）他多数

受賞

平山郁夫賞受賞、サロン・ド・ブランタン受賞、

原田賞受賞、日本漆工協会漆工賞受賞、

国際漆展石川 2002 大賞受賞

2002 年 4 月着任

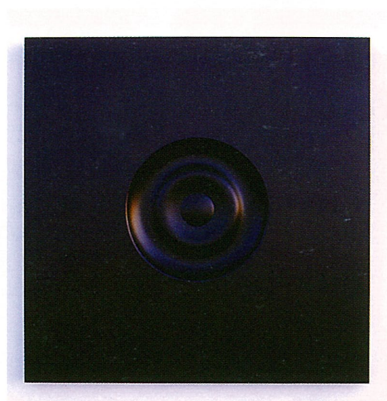
光と闇の邂逅

現代の建築空間における光の取り入れ方には異文化からの様々な様式があり、従来の日本建築の陰翳の空間は失われてきています。今はどちらかというと西洋風であり、ローマのベルニーニの礼拝堂のように天井光を取り入れるなど、下手をするとすべてガラス張りになったものも多く見受けられます。それらは異国の文化や風土に関係なく取り入れられ、支離滅裂な文化社会を形成してきました。これは一方的な西洋文化の取り入れにより伝統的な技術や価値観を無視してきた日本の美術観に問題があり、これは国際的に多様化した社会に日本の文化を埋め戻してはじめて新たな日本文化を形成できるはずで

そんな中、漆は古来より日本の文化の発展をにない、その技術は先端技術を支え、その意匠はジャポニズムを初めとする様々な芸術やデザインに多大な影響を及ぼしました。又それを形成してきたのは漆という素材のみならず古代ローマや、ギリシャ、インド、ペルシャ、中国、南北朝、日本と宗教の伝来と共に発展し、その風土と共に独自の文化が生まれたてきました。

私は漆という素材の魅力の深さと技術の継承を必要とする難しさのなかに向き合い挫折と格闘をくり返す中に、私の求める闇と光の世界と漆本来の性質の共通点をわずかながら見つけだし始めました。本来日本の漆文化は屋根の長い家屋が中心で自然光は直接入る事はなく光のバウンスよりとり入れられ、夜は燭台のあかりのみの世界でした。その中でいかに光を取り入れる方法として、金屏風の照り返しや金欄豪華な蒔絵を好み、浮かび上がる微かな光に心を奪われていたのです。そのコンセプトも阿弥陀仏を無量寿光仏、無量寿仏などと訳すように大仏は人のかたちをなしていますが、それは単に姿を借りているだけで『光』そのものであり、宇宙というものの根源を『光』とし『光』が凝縮して重なったものが大仏であるように、古来より光に対して非常に仏心的で繊細であったためでもあります。

現代における光の捕らえ方に人工照明を使った方が光の効果は自由にできますが、「現代人には太陽光はぜひとも必要」（ル・コルビュジェ）のように公共という近代性は日中の明るさを要求しています。しかしこれをいかにして日本の「侘び」を保存しつつ、しかも明るさを得て公共性をたらしめるかは、漆の陰翳の世界をもとに現代の日本の「侘び」を追求する必要があり、私の今後の制作のテーマでもあります。



《[溜] II 存在する闇 内包する光 より》

1999

漆、栃

W893 × D50 × H893cm

The Ishikawa International Urushi Exhibition 2002 Grand Prize